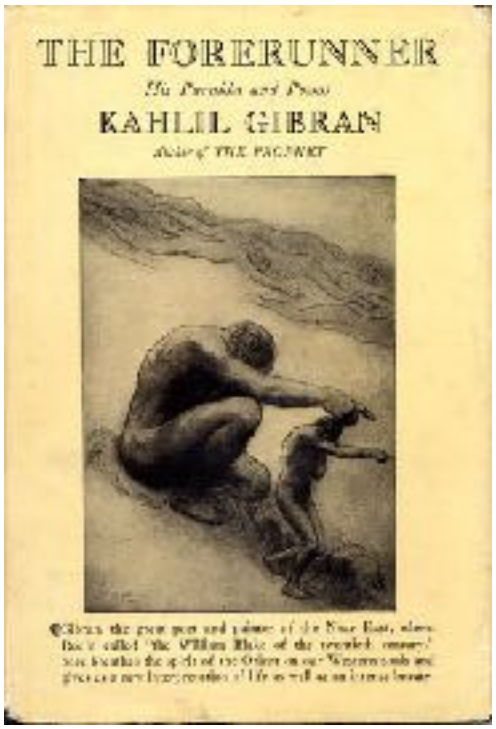
ハリール・ジブラーン

Kahlil Gibran

『先駆者』

The Forerunner



神秘学遊戯団

■ハリール・ジブラーン
Kahlil Gibran
『先駆者』
（The Forerunner）

1920年にアルフレッド・A・クノップフ社から刊行された英語の寓話・詩集。
『狂人』（1918年）に続く2冊目の英語寓話集で、
『預言者』（1923年）の3年前に出ている。

ジブラーンが英語で書き始めた初期の重要な一冊で、
『狂人』と同じく、聖書的なリズムを持つ短い散文詩・寓話が並び、
のちの『預言者』に通じる思想
（自己の大いなる可能性、愛、孤独、社会の偽善、内面の真実）が
すでにはっきり現れていて、
「あなたはあなた自身の先駆者である」という冒頭の言葉が、
作品全体の核になっている。

〔目次〕

神の愚か者／愛／王なる隠者／獅子の娘／専制／聖人
富豪／より大いなる自己／戦争と小国／批評家
詩人たち／風見鶏／アラドゥスの王／より深い心から
王朝／知識と半知識／一枚の雪白の紙が言った……
学者と詩人／価値／ほかの海／悔い改め／死にゆく男と禿鷹
私の孤独の彼方／最後の見張り

●本文

あなたはあなた自身の先駆者である。あなたが築いた塔は、あなたの巨人なる自己の土台にすぎない。そしてその自己もまた土台となるであろう。

私もまた私自身の先駆者である。日の出に私の前に伸びる長い影は、正午には私の足もとに集まるであろう。しかしまた別の日の出が、別の影を私の前に横たえ、それもまた別の正午に集められるであろう。

常に我らは我ら自身の先駆者であり、常にそうであろう。我らが集め、また集めるであろうすべてのものは、まだ耕されぬ野のための種にすぎない。我らは野であり耕す者であり、集める者であり集められる者である。

あなたが霞の中のさまよう欲望であったとき、私もまたそこにいた、さまよう欲望として。それから我らは互いを求め、我らの熱望から夢が生まれた。夢は限りなき時であり、夢は測りえない空間であった。

そしてあなたが生の震える唇の上の沈黙の言葉であったとき、私もまたそこにいた、もう一つの沈黙の言葉として。それから生が我らを発し、我らは昨日の記憶と明日への憧れに脈打ちながら年月を降りてきた。昨日は征服された死であり、明日は追われる誕生であった。

今、我らは神の手の中にある。あなたは神の右手の太陽であり、私は神の左手の地球である。しかし輝くあなたは、照らされる私よりも多く輝くわけではない。

そして我ら、太陽と地球は、より大いなる太陽とより大いなる地球の始まりにすぎない。常に我らは始まりであろう。

あなたはあなた自身の先駆者である。私の庭の門を通り過ぎる見知らぬ者よ。

私もまた私自身の先駆者である。私の木々の影に座り、動かぬように見えても。

〔神の愚か者〕

かつて砂漠から、シャリアの大いなる都へ、一人の夢見る者がやって来た。彼は衣と杖のほか何も持っていなかった。

通りを歩きながら、彼は畏れと驚きをもって神殿と塔と宮殿を見つめた。シャリアの都は並ぶもののない美しさであったからである。彼はしばしば行き交う人々に語りかけ、その都について尋ねた。しかし彼らは彼の言葉を理解せず、彼もまた彼らの言葉を理解しなかった。

正午、彼は広大な宿屋の前に立ち止まった。それは黄色い大理石で造られ、人々は妨げられずに出入りしていた。

「これは聖所に違いない」と彼は心のうちに言い、彼もまた中へ入った。しかしなんという驚きか、彼は大いなる輝きの広間にいる自分を見いだし、多くの卓を囲んで座っている大勢の男と女を見た。彼らは食べ、飲み、楽士たちに耳を傾けていた。

「いや」と夢見る者は言った。「これは礼拝ではない。王子が大いなる出来事を祝って民に与える宴に違いない。」

ちょうどそのとき、彼が王子の僕だと思った男が近づき、座るよう命じた。そして彼は肉と葡萄酒と最上の菓子でもてなされた。

満ち足りると、夢見る者は立ち去ろうと立ち上がった。戸口で、華麗に身を包んだ大柄な男に止められた。

「これは王子その人に違いない」と夢見る者は心のうちに言い、彼に礼をし、感謝した。

すると大柄な男は都の言葉で言った。「閣下、あなたは夕食の代を払っていない。」夢見る者は理解せず、再び心から感謝した。すると大柄な男は考え、夢見る者をより近く見た。彼が貧しい衣だけをまとった見知らぬ者であり、まことに食事の代を払うものを持たぬのを見た。それから大柄な男は手を叩いて呼び、都の四人の番人が来た。彼らは大柄な男の言葉を聞いた。それから彼らは夢見る者をあいだに取り、両側に二人ずつついた。夢見る者はその衣と作法の儀式ばったさまに気づき、喜びをもって彼らを見た。

「これらは」と彼は言った。「高貴な人々である。」

そして彼らはともに歩き、裁きの家に来て入った。

夢見る者は、王座に座っている、流れひげをたくわえ、威厳ある衣をまとった尊い男を前に見た。そして彼を王だと思った。彼の前に連れて来られたことを喜んだ。

さて番人たちは、その尊い男である裁判官に、夢見る者に対する訴えを語った。裁判官は二人の弁護人を任命し、一人は訴えを述べ、もう一人は見知らぬ者を守らせた。弁護人たちは次々に立ち上がり、それぞれ論を述べた。夢見る者は歓迎の演説を聞いていると思い、自分のためになされたすべてのことに対して、王と王子への感謝で心が満ちた。

それから夢見る者に判決が下された。首にかけた板にその罪が書かれ、裸馬に乗って都を行き、その前にラッパ吹きと太鼓打ちがつくべし、と。判決はただちに執行された。

さて夢見る者が裸馬に乗り、ラッパ吹きと太鼓打ちを前にして都を行くと、都の住民はその音に走り出て、彼を見ると一人残らず笑い、子供たちは群れをなして通りから通りへと彼の後を走った。夢見る者の心は恍惚に満ち、その目は彼らに輝いた。彼にとってその板は王の祝福のしるしであり、行列は彼を称えるものであったからである。

さて彼が騎っていると、群衆の中に自分と同じく砂漠から来た男を見て、心が喜びに膨らみ、叫びをもって彼に声をかけた。

「友よ！友よ！我らはどこにいるのか。これは心の望みの何という都か。何という惜しみなき主人たちの種族か。――たまたまの客人を宮殿でもてなし、王子がともに歩み、王がその胸にしるしをかけ、天から降りた都のもてなしを彼に開くとは。」

砂漠の者もまた答えない。ただ微笑み、わずかに頭を振っただけであった。行列は進んだ。

夢見る者の顔は上げられ、その目は光に溢れていた。

〔愛〕

人は言う、ジャッカルと土竜は
獅子が飲みに来る
同じ流れから飲む、と。

人は言う、鷲と禿鷹は
同じ死骸に嘴を突き入れ、
死せるものの前では
互いに平和である、と。

おお愛よ、その高貴な手は
私の欲望に轡をかけ、
私の飢えと渇きを
尊厳と誇りへと上げた。
私のうちの強く、変わらぬものが
より弱い私を誘う

パンを食べ、葡萄酒を飲むことなからしめよ。
むしろ飢えさせよ、
心を渇きで乾かせよ、
死なせ、滅びさせよ、
あなたが満たさなかった杯に、
あなたが祝福しなかった鉢に
私が手を伸ばすよりは。

〔王なる隠者〕

人々は私に語った。山々のあいだの森に、孤独のうちに一人の若者が住み、かつては二つの川のかなたの広大な国の王であった、と。また彼らは言った。彼は自らの意志で王座と栄光の地を去り、荒野に住まいに来た、と。私は言った。「その男を求め、その心の秘密を知りたい。王国を捨てる者は、王国よりも大いなる者でなければならないからである。」

まさにその日、私は彼の住む森へ行った。白い糸杉の下に座っている彼を見つけ、その手には笏のように一本の葦があった。私は王に挨拶するように彼に挨拶した。

彼は私のほうを向き、優しく言った。「この静けさの森で何を望むのか。緑の影のうちに失われた自己を求めるのか、それとも黄昏の帰郷か。」

私は答えた。「私はただあなたを求めた。王国を捨てて森へ来させたものを知りたいからです。」彼は言った。「私の物語は短い。泡の破裂が突然であったからだ。こうであった。ある日、宮殿の窓に座っていると、侍従長と外国からの使者が庭を歩いていた。彼らが私の窓に近づくと、侍従長は自分について語り、『私は王のようだ。強い葡萄酒への渇きと、すべての賭け事への飢えがある。わが主君なる王のように、私にも気性の嵐がある』と言っていた。侍従長と使者は木々のあいだに消えた。しかし数分のうちに戻り、今度は侍従長が私について語り、『わが主君なる王は私のようだ――優れた射手であり、私のように音楽を愛し、一日に三度浴する』と言っていた。」

しばらくして彼は付け加えた。「その日の夕方、私は衣だけを持って宮殿を去った。もはや、悪徳を身に引き受け、自分の美徳を私に帰する者たちの上に、統治者でありたくなかったからである。」

私は言った。「これはまことに不思議であり、あまりに奇異なことです。」

彼は言った。「いや、わが友よ、あなたは私の沈黙の門を叩き、わずかしか受け取らなかった。季節が絶えず歌い踊る森のために、王国を去らぬ者があろうか。孤独と、ひとりであることの甘い交わりよりも少ないもののために、王国を与えた者は多い。地の秘密を知るために、上の空から降りて土竜とともに住む鷲は数えきれない。夢なき者から遠く見えぬように、夢の王国を捨てる者がいる。覆われぬ真実とヴェールを取られた美を見て他者が恥じぬように、裸の王国を捨て、魂を覆う者がいる。そしてこれらすべてよりもなお大いなる者は、高慢で虚栄に見えぬように、悲しみの王国を捨てる者である。」

それから彼は立ち上がり、葦に寄りかかって言った。「今、大いなる都へ行き、その門に座って、入る者も出る者もすべて見守れ。生まれながら王でありながら王国を持たぬ者を見いだせ。肉において治められながら霊において治める者を見いだせ――彼もその民もこれを知らぬにもかかわらず。また、治めているように見えながら、実は自らの奴隷たちの奴隷である者をも見いだせ。」

これらのことを言ったあと、彼は私に微笑んだ。その唇には千の夜明けがあった。それから彼は向きを変え、森の心へと歩いていった。

私は都へ戻り、彼が告げたとおり、門に座って行き交う人々を見守った。その日から今日まで、私の上を影が過ぎった王は数えきれず、私の影がその上を過ぎった民は少ない。

〔獅子の娘〕

四人の奴隷が、王座で眠る老女王を扇いで立っていた。彼女はいびきをかいていた。女王の膝の上では猫が喉を鳴らし、怠惰に奴隷たちを見つめていた。

第一の奴隷が口を開いて言った。「眠っているこの老婆はなんと醜いことか。口の下がっているのを見よ。悪魔が喉を絞めているかのように息をしている。」

すると猫は喉を鳴らして言った。「眠っている彼女の醜さは、目覚めた奴隷であるお前の半分にも及ばない。」

第二の奴隷が言った。「眠りは皺を深めるどころか、滑らかにすると思えるのに。何か邪悪なものを夢見ているに違いない。」

猫は喉を鳴らして言った。「お前も眠って、自由を夢みることができればよいものを。」

第三の奴隷が言った。「おそらく彼女は、自ら殺した者すべての行列を見ているのだ。」

猫は喉を鳴らして言った。「ええ、彼女はお前の先祖と子孫の行列を見ている。」

第四の奴隷が言った。「彼女について話すのは結構だが、立って扇いでいる疲れが減るわけではない。」

猫は喉を鳴らして言った。「お前は永遠に扇ぐだろう。地にあるとおり、天にもあるのだから。」

ちょうどそのとき、老女王が眠りのうちにうなずき、冠が床に落ちた。

奴隷の一人が言った。「悪い前兆だ。」

猫は喉を鳴らして言った。「一方の悪い前兆は、他方のよい前兆である。」

第二の奴隷が言った。「彼女が目覚めて、冠が落ちているのを見つけたらどうなる。きっと我らを殺すだろう。」

猫は喉を鳴らして言った。「生まれた日から毎日、彼女はお前を殺してきた。お前はそれを知らぬだけだ。」

第三の奴隷が言った。「そうだ、彼女は我らを殺し、それを神々への犠牲と呼ぶだろう。」

猫は喉を鳴らして言った。「弱き者だけが神々に犠牲にされる。」

第四の奴隷は他の者を黙らせ、そっと冠を拾い、彼女を起こさずに老女王の頭に戻した。

猫は喉を鳴らして言った。「落ちた冠を戻すのは、奴隷だけである。」

しばらくして老女王は目覚め、あたりを見てあくびをした。それから言った。「夢を見たと思った。古い樫の幹のまわりを、サソリに追われる四匹の毛虫を見た。私はその夢が好きではない。」

それから彼女は目を閉じ、再び眠った。そしていびきをかいた。四人の奴隷は彼女を扇ぎ続けた。猫は喉を鳴らして言った。「扇げ、扇げ、愚か者ども。お前たちは自分を焼き尽くす火を扇いでいるだけだ。」

〔専制〕

海辺の七つの洞窟を守る雌竜はこう歌う。

「わが伴侶は波に乗って来るだろう。その雷のような叫びは地を恐れで満たし、鼻孔の炎は空を燃やすだろう。月食のときに我らは結ばれ、日食のときに私は聖ゲオルギウスを産むだろう。そして彼は私を殺すだろう。」

海辺の七つの洞窟を守る雌竜はこう歌う。

〔聖人〕

若いころ、私は丘のかなたの静かな林に聖人を訪ねたことがある。徳の本質について語り合っていると、盗賊が疲れきって脚を引きずりながら尾根を上ってきた。林に着くと、彼は聖人の前に跪いて言った。「おお聖人よ、慰められたい。私の罪は重い。」

聖人は答えた。「私の罪もまた重い。」

盗賊は言った。「しかし私は盗人であり、略奪者です。」

聖人は答えた。「私もまた盗人であり、略奪者である。」

盗賊は言った。「しかし私は殺人者であり、多くの男の血が耳の中で叫んでいます。」

聖人は答えた。「私もまた殺人者であり、私の耳にも多くの男の血が叫んでいる。」

盗賊は言った。「私は数えきれぬ罪を犯しました。」

聖人は答えた。「私もまた数えきれぬ罪を犯した。」

すると盗賊は立ち上がって聖人を見つめた。その目には不思議な色があった。彼が去るとき、丘を跳ねるように下りていった。

私は聖人のほうを向いて言った。「なぜ犯してもいない罪を自らに負わせたのですか。この男が、もはやあなたを信じずに去ったのがおわかりになりませんか。」

聖人は答えた。「たしかに、彼はもはや私を信じない。しかし彼は大いに慰められて去った。」

その瞬間、遠くで盗賊の歌うのが聞こえ、その歌の響きが谷を喜びで満たした。

〔富豪〕

放浪のおり、ある島で、人の頭と鉄の蹄を持つ怪物を見た。彼は絶えず地を食べ、海を飲んでいた。しばらく彼を見守ってから、近づいて言った。「まだ足りぬのか。飢えは決して満たされず、渇きは決して癒されぬのか。」

彼は答えて言った。「ええ、私は満ち足りている。いや、食べることと飲むことに飽きている。しかし明日は、食べる地も飲む海もなくなるのではないかと恐れている。」

〔より大いなる自己〕

こうなった。ビブロスの王ヌフシバールの戴冠のあと、彼は寝室へ退いた。山の三人の隠者魔術師が彼のために造った、まさにその部屋である。彼は冠と王衣を脱ぎ、部屋の中央に立って、今やビブロスの全能の統治者である自分について思った。

突然彼は向きを変えた。母が与えた銀の鏡から、裸の男が出て来るのを見た。

王は驚き、その男に叫んだ。「何を望む。」裸の男は答えた。「ただこれだけだ。なぜ彼らはあなたを王に戴いたのか。」

王は答えた。「この地で最も高貴な者だからである。」

すると裸の男は言った。「なお高貴であったなら、あなたは王ではなかっただろう。」

王は言った。「この地で最も力ある者だから、彼らは私を戴いた。」

裸の男は言った。「なお力があったなら、あなたは王ではなかっただろう。」

すると王は言った。「最も賢い者だから、彼らは私を王に戴いた。」

裸の男は言った。「なお賢かったなら、あなたは王であることを選ばなかっただろう。」

すると王は床に伏して激しく泣いた。

裸の男は彼を見下ろした。それから冠を取り、優しさをもって王の垂れた頭に戻した。

裸の男は愛情をもって王を見つめ、鏡の中へ入った。

王は正気に戻り、ただちに鏡を見た。そこには、戴冠した自分しか見えなかった。

〔戦争と小国〕

かつて、羊と子羊が草を食む牧場の高みで、鷲が旋回し、飢えて子羊を見下ろしていた。獲物を襲おうと降りようとしたとき、もう一羽の鷲が現れ、同じ飢えの意図をもって羊とその子の上を舞った。すると二人のライバルは戦い始め、激しい叫びで空を満たした。

羊は見上げてたいそう驚いた。子羊のほうを向いて言った。

「わが子よ、なんと不思議なことだ。この二羽の高貴な鳥が互いに攻め合うとは。広大な空は両方に足りぬほど狭いか。お願いだ、小さき者よ、心のうちに祈れ。神が翼ある兄弟たちのあいだに平和を与えてくださるように。」

子羊は心のうちに祈った。

〔批評家〕

ある夕暮れ、馬に乗って海へ向かう男が、道傍の宿屋に着いた。彼は降り、海へ向かうすべての騎手のように人と夜を信じて、戸口のそばの木に馬をつないで宿に入った。

真夜中、すべてが眠っているとき、盗人が来て旅人の馬を盗んだ。

朝、男は目覚め、馬が盗まれたのを知った。彼は馬を悲しみ、人が心のうちに盗むことを見いだしたことを悲しんだ。

すると同宿の者たちが来て彼のまわりに立ち、話し始めた。

第一の男が言った。「馬を厩の外につないだとは、なんと愚かだ。」

第二の男が言った。「足を縛りもしなかったとは、なお愚かだ。」

第三の男が言った。「馬で海へ旅すること自体が、そもそも愚かだ。」

第四の男が言った。「怠惰な者と足の遅い者だけが馬を持つ。」

旅人はたいそう驚いた。ついに彼は叫んだ。「わが友よ、馬が盗まれたゆえに、諸君はこぞって急いで私の過ちと欠点を告げた。しかし不思議なことに、馬を盗んだ男について、非難の言葉は一言もない。」

〔詩人たち〕

四人の詩人が、卓の上のパンチの鉢を囲んで座っていた。

第一の詩人が言った。「第三の目で見える気がする。この酒の香りが、魔法の森の鳥の雲のように空間に漂っている。」

第二の詩人は頭を上げて言った。「内なる耳で、その霞の鳥たちが歌うのが聞こえる。その調べは私の心を捕らえ、白い薔薇が花弁のうちに蜂を閉じ込めるようだ。」

第三の詩人は目を閉じ、腕を上へ伸ばして言った。「手で彼らに触れる。眠る妖精の息のように、その翼が指を撫でるのを感じる。」

すると第四の詩人は立ち上がって鉢を持ち上げ、言った。「ああ、友よ！私は目も耳も触覚も鈍すぎる。この酒の香りを見ることも、その歌を聞くことも、翼の鼓動を感じることもできない。私は酒そのものしか知覚しない。ゆえに今それを飲まねばならない。感覚を研ぎ、諸君の至福の高みへ私を上げるために。」

そして鉢を唇に当て、最後の一滴までパンチを飲んだ。

三人の詩人は口を開けて茫然と彼を見つめ、その目には渇いた、しかし詩なき憎しみがあった。

〔風見鶏〕

風見鶏が風に言った。「なんと退屈で単調なことか！私の顔以外のほうに吹けないのか。神から与えられた安定を乱すではないか。」

風は答えなかった。ただ空で笑った。

〔アラドゥスの王〕

かつてアラドゥスの都の長老たちが王の前に出て、市内のすべての葡萄酒とすべての酔いをもたらすものを人に禁ずる法令を懇願した。

王は彼らに背を向け、笑いながら出て行った。

長老たちはうろたえながら去った。

宮殿の戸口で彼らは侍従長に出会った。侍従長は彼らが困っているのに気づき、その事情を理解した。

それから言った。「残念です、わが友よ！王が酔っているところを見つけていたら、たしかに願いは聞き届けられたでしょうに。」

〔より深い心から〕

より深い心から一羽の鳥が立ち上がり、空へ飛んだ。

ますます高く昇り、しかもますます大きくなった。

初めは燕のよう、それから雲雀、それから鷲、それから春の雲のように広大になり、それから星の天を満たした。心から一羽の鳥が空へ飛んだ。飛びながら大きくなった。しかし心を去らなかった。

……

おおわが信仰よ、わが馴らされぬ知識よ、いかにしてあなたの高さへ飛び、空に描かれた人間のより大いなる自己を、あなたとともに見ればよいのか。

いかにして内なるこの海を霞に変え、測りえない空間であなたとともに動けばよいのか。

神殿のうちの囚人は、いかにしてその黄金のドームを見られようか。

果実の心は、いかにして伸ばされて果実をも包めようか。

おおわが信仰よ、私はこの銀と黒檀の格子の後ろに鎖でつながれ、あなたとともに飛べないでいる。

それでも心からあなたは空へ昇る。そしてあなたを抱いているのは私の心であり、私は満足するであろう。

〔王朝〕

イシャナの女王は産の苦しみのうちにあった。王とその宮廷の力ある者たちは、有翼の牡牛の大広間で息をひそめて待っていた。

夕暮れ、急を知らせる使者が突然来て王の前にひれ伏し、言った。「わが主君なる王に、また王国と王の奴隷たちに、喜びの知らせを持って参りました。残酷なるミフラブ、生涯の敵、ベスラウンの王が死にました。」

王と力ある者たちこれを聞くと、みな立ち上がって喜びの叫びを上げた。力あるミフラブがなお生きていたなら、たしかにイシャナを打ち負かし、住民を捕虜としたであろうからである。

ちょうどそのとき、宮廷医もまた有翼の牡牛の広間に入り、その後ろに王の産婆たちが来た。医は王の前にひれ伏して言った。「わが主君なる王は永遠に生き、無数の世代を通してイシャナの民を治められるでしょう。王よ、まさにこの時、世継ぎとなる息子があなたに生まれました。」

すると王の魂はまことに喜びで酔った。同じ瞬間に敵が死に、王家の血統が定まったからである。

さてイシャナの都には真の預言者が住んでいた。預言者は若く、気性が大胆であった。王はその夜、預言者を面前に連れて来るよう命じた。連れて来られると、王は彼に言った。「今預言せよ。今日王国に生まれたわが息子の未来を告げよ。」

預言者はためらわずに言った。「聞け、王よ。今日生まれたあなたの息子の未来を、まことに預言しよう。あなたの敵、夕べに死んだミフラブ王の魂は、一日だけ風の上にとどまった。それから入るべき体を自ら求めた。そしてそれが入ったのは、この時あなたに生まれた息子の体である。」

すると王は怒り、剣をもって預言者を殺した。

その日から今日まで、イシャナの賢者たちは密かに互いに言う。「知られていないか。古くから言われていないか。イシャナは敵に治められている、と。」

〔知識と半知識〕

四匹の蛙が、川の縁に浮かぶ丸太の上に座っていた。突然その丸太は流れに捕らわれ、ゆっくりと下流へ流された。蛙たちは喜び、夢中になった。これまで航海したことがなかったからである。

ついに第一の蛙が口を開いて言った。「これはまことに最も不思議な丸太だ。生きているかのように動く。このような丸太はこれまで知られていなかった。」

すると第二の蛙が口を開いて言った。「いや、わが友よ、この丸太は他の丸太と同じで、動かない。動いているのは川であり、海へ歩いて、我らと丸太を運んでいるのだ。」

第三の蛙が口を開いて言った。「動いているのは丸太でも川でもない。動きは我らの思考のうちにある。思考なくして何ものも動かない。」

三匹の蛙は、何が本当に動いているかについて言い争った。争いはますます熱く、大きくなったが、一致できなかった。

それから彼らは、それまで注意深く聞いて黙っていた第四の蛙のほうを向き、その意見を求めた。

第四の蛙は言った。「お前たちそれぞれが正しく、誰も間違っていない。動きは丸太のうちにも、水のうちにも、我らの思考のうちにもある。」

三匹の蛙はたいそう怒った。自分の言うことが全体の真実ではなく、他の二匹がまったく間違っていないことを認めるのを、誰も望まなかったからである。

すると不思議なことが起きた。三匹の蛙は一緒になって、第四の蛙を丸太から川へ押し落とした。

〔一枚の雪白の紙が言った……〕

一枚の雪白の紙が言った。「私は清く創られ、永遠に清くとどまろう。闇が私に触れ、汚れたものが近づくのに耐えるよりは、焼かれて白い灰になるほうを選ぶ。」

インク壺は紙の言うことを聞き、暗い心のうちで笑った。しかし決して彼女に近づこうとしなかった。色とりどりの鉛筆もまた彼女の言葉を聞き、彼らもまた決して近づかなかった。

雪白の紙は永遠に清く貞潔なままであった――清く貞潔なまま――そして空のままであった。

〔学者と詩人〕

蛇が雲雀に言った。「お前は飛ぶ。しかし生の樹液が完全な沈黙のうちに動く、地の奥へは行けない。」

雲雀は答えた。「ええ、あなたは知りすぎている。いや、賢いものすべてのうちで最も賢い。飛べないのが惜しい。」

聞かなかったかのように、蛇は言った。「お前は深みの秘密を見ることも、隠された帝国の宝のあいだを動くこともできない。つい昨日、私は紅玉の洞窟に横たわっていた。それは熟した石榴の心のようで、最もかすかな光の筋がそれを炎の薔薇に変える。私のほかに誰がそのような不思議を見られよう。」

雲雀は言った。「誰も、あなたよりほかに、循環の水晶の記憶のうちに横たわることはできない。歌えないのが惜しい。」

蛇は言った。「根が地の臓腑まで降りる植物を私は知っている。その根を食べる者はアシュタルテよりも美しくなる。」

雲雀は言った。「誰も、あなたよりほかに、地の魔法の思いを覆い取ることはできない。飛べないのが惜しい。」

蛇は言った。「山の下を走る紫の流れがあり、それを飲む者は神々と同じく不死となる。鳥も獣も、たしかにあの紫の流れを見いだせない。」

雲雀は答えた。「望めば、神々と同じく死なぬ者にもなれる。歌えないのが惜しい。」

蛇は言った。「私は埋もれた神殿を知っており、月に一度訪れる。それは忘れられた巨人の種族が建て、壁には時と空間の秘密が刻まれ、それを読む者はすべての理解を超えるものを理解する。」

雲雀は言った。「まことに、望めば、しなやかな体であなたは時と空間のすべての知識を囲むことができる。飛べないのが惜しい。」

すると蛇は嫌気がさし、向きを変えて穴に入りながらつぶやいた。「頭の空っぽな歌い手め！」

雲雀は飛び去りながら歌った。「歌えないのが惜しい。惜しい、惜しい、わが賢き者よ、あなたは飛べない。」

〔価値〕

かつて一人の男が畑で、たいそう美しい大理石の彫像を掘り起こした。彼は美しいものをすべて愛する収集家のもとへそれを持って行き、売ると申し出て、収集家は高い値でそれを買った。そして彼らは別れた。

男は金を持って家路につきながら思い、心のうちに言った。「この金はどれほどの生を意味することか。千年も地に埋もれ、夢みられることさえなかった死んだ彫られた石に、どうして誰もこれほどを与えられよう。」

今、収集家はその彫像を見て思い、心のうちに言った。「なんという美か！なんという生か！何という魂の夢か！――そして千年の甘い眠りで新鮮である。どうして誰も、死んで夢なき金に、これほどを与えられよう。」

〔ほかの海〕

一匹の魚がもう一匹の魚に言った。「我らのこの海の上に、もう一つの海があり、そこに泳ぐ生き物がいる――彼らも我らがここに生きるように、そこに生きている。」

その魚は答えた。「純粋な空想だ！純粋な空想だ！我らの海を一寸でも離れて外にとどまるものはすべて死ぬと知っているではないか。ほかの海にほかの生があるという、何の証拠があるのか。」

〔悔い改め〕

月のない夜、一人の男が隣人の庭に入り、見つけうる最も大きな瓜を盗んで家へ持ってきた。

それを割ると、まだ熟していなかった。

すると見よ、不思議が起きた！

男の良心が目覚め、悔いをもって彼を打ち、彼は瓜を盗んだことを悔い改めた。

〔死にゆく男と禿鷹〕

待て、もうしばらく待て、わが焦る友よ。
私はこの痩せ衰えたものを、あまりに早く渡すだろう。
その過度で無用の苦しみが
あなたの忍耐を尽きさせている。
私はあなたの正直な飢えを
これらの瞬間に待たせたくはない。
しかしこの鎖は、息でできていても、
断ち難い。
死ぬ意志は、
強いものすべてより強いのに、
生きる意志に引き留められる。
弱いものすべてより弱いその意志に。

許せ、仲間よ。私はあまりに長くとどまる。
私の霊を捉えているのは記憶である。

遠い日々の行列、
夢のうちに過ごした若さの幻、
私の瞼に眠るなと命じる顔、
耳に残る声、
私の手に触れる手。

あまりに長く待たせたことを許せ。
今は終わった。すべてが褪せた――
顔も、声も、手も、
それらをここに運んだ霞も。
結び目は解けた。
縄は断たれた。
食べものでも飲み物でもないものは、引き去られた。

近づけ、わが飢えた仲間よ。
卓は整えられた。
乏しく質素な食事は
愛をもって与えられる。
さあ、左の側に嘴を突き入れ、
もはや翼を打てぬこの小さな鳥を
籠から引き裂いてくれ。
私はそれがあなたとともに空へ舞うことを望む。
さあ来たれ、わが友よ。今夜私は主人、
あなたは歓迎される客人である。

〔私の孤独の彼方〕

私の孤独の彼方に、もう一つの孤独がある。そこに住む者にとって、私のひとりであることは混雑した市場であり、私の沈黙は音の混乱である。

私は若すぎ、落ち着かなすぎ、その上なる孤独を求められない。あそこの谷の声がなお耳を捉え、その影が道を遮り、私は行くことができない。

これらの丘の彼方に魔法の林があり、そこに住む者にとって、私の平和はただの旋風であり、私の魅惑は幻である。

私は若すぎ、荒れすぎて、その聖なる林を求められない。血の味が口に残り、父祖の弓と矢がなお手にあり、私は行くことができない。

この重荷を負う自己の彼方に、より自由な自己が生きている。彼にとって、私の夢は黄昏に戦われた戦いであり、私の欲望は骨の鳴る音である。

私は若すぎ、傷つけられすぎて、より自由な自己ではいられない。

重荷を負う自己たちを殺すのでなければ、あるいはすべての人が自由になるのでなければ、いかにしてより自由な自己となりえるだろうか。

根が闇のうちに枯れなければ、いかにして葉は風に乗って歌い飛べるだろうか。

自ら嘴で築いた巣から雛が去るまで、いかにして私の内なる鷲は太陽に向かって舞い上がれるだろうか。

〔最後の見張り〕

夜が満ち潮を迎え、夜明けの最初の息吹が風に乗って訪れたとき、「先駆者」――いまだ聞こえぬ声のこだまと自らを呼ぶ者は、寝所をあとにし、我が家の屋根へと登った。彼は長く佇み、眠りについた街をじっと見下ろしていた。

やがて彼は頭（こうべ）を上げ、まるで眠れるすべての人々の、眠りなき魂が自分の周りに集まったかのように、唇を開いて、こう語りかけた。

わが友よ、わが隣人よ、日ごと私の門を通り過ぎる人々よ。私はあなたがたの眠りの中で語りかけ、夢の谷間を裸のまま何に縛られることもなく歩みたい。あなたがたが目覚めている時間はあまりにも心なく、雑音に満ちたその耳は何も聞こえていないから。

私は長い間、あなたがたを愛してきた。あまりにも深く。

私はあなたがたの中のひとりを、まるでそれがすべてであるかのように愛し、すべての人を、まるでひとりの人間であるかのように愛した。そして私の心の春には、あなたがたの庭で歌い、私の心の夏には、あなたがたの脱穀場で見張りをしていた。

そう、私はあなたがたすべてを愛した。巨人も小人も、癩病を患う者も聖油を注がれた者も、暗闇の中を手探りで進む者も、山の上で日々を踊り明かす者も。

強き者よ、私はあなたを愛した。あなたの鉄の蹄の跡が、今も私の肉体に残っているというのに。 そして弱き者よ、私はあなたを愛した。あなたが私の信仰を吸い尽くし、私の忍耐をすり減らしたというのに。

富める者よ、私はあなたを愛した。あなたの蜂蜜が、私の口には苦かったときでさえ。 そして貧しき者よ、私はあなたを愛した。あなたが私の手ぶらの恥を知っていたというのに。

借り物のリュートと、盲目の指を持つ詩人よ、私は身勝手なほどの愛をあなたに注いだ。そして、陶器師の墓地で、腐りかけた経帷子をいつも集めている学者よ、私はあなたを愛した。

昨日の静寂の中に座り、私の明日の運命を問いかける司祭よ、私はあなたを愛した。そして、自分自身の欲望の生き写しである神々を崇める者たちよ、私はあなたを愛した。

杯が常に満たされている、渇いた女よ、私は理解をもってあなたを愛した。 そして、落ち着かぬ夜を過ごす女よ、私は憐れみをもってあなたをも愛した。

「人生には語るべきことがたくさんある」と言う、お喋りな者を私は愛した。 そして、口のきけない者を私は愛し、自分にこう囁いた。「この者は、私が言葉で聞きたいと切望していることを、沈黙の中で語っているのではないか？」

そして、裁判官や批評家よ、私はあなたをも愛した。だが、あなたがたは私が十字架にかけられるのを見たとき、こう言ったのだ。「彼はリズミカルに血を流している。彼の白い肌に血が描く模様は、なんと美しいのだろう」と。

そうだ、私はあなたがたすべてを愛した。若き者も老いたる者も、震える葦も、逞しい樫の木も。

しかし、ああ！ あなたがたを私から遠ざけたのは、私の心があまりにも溢れんばかりに満ちていたからだった。あなたがたは愛を杯から飲み干したがり、うねる大河からは飲もうとしなかった。あなたがたは愛のかすかな囁きは聞きたがるが、愛が叫び声をあげるときには耳を塞いでしまう。

私があなたがたすべてを愛したからこそ、あなたがたはこう言った。「彼の心はあまりにも脆く、流されやすい。その歩みはあまりにも見境がない。それは、王の宴席に座りながらもパン屑を拾うような、飢えた者の愛だ。 そしてそれは弱虫の愛だ、強い者は強い者だけを愛するのだから」と。

私があなたがたを愛しすぎたからこそ、あなたがたはこう言った。「それは他人の美しさも醜さもわからない、盲目の者の愛にすぎない。ワインのように酢を飲むような、味のわからない者の愛だ。そしてそれは無礼で傲慢な者の愛だ。どこの馬の骨ともわからない者が、私たちの父や母、姉妹や兄弟になれるというのか？」と。

あなたがたはこう言い、さらに言葉を重ねた。市場で何度も私を指差し、嘲笑ってこう言った。「見ろ、歳をとらない男が行くぞ。季節を持たない男が。真昼には私たちの子供たちと遊び、夕暮れには長老たちと座って、知恵や理解を気取っているぞ」と。

そこで私は言った。「私は彼らをさらに愛そう。そう、もっとだ。私は愛を憎しみの振る舞いで隠し、私の優しさを苦々しさでカモフラージュしよう。鉄の仮面をかぶり、武器と甲冑に身を固めたときだけ、彼らに会いに行こう」

そして私は、あなたがたの傷口に重い手を置き、夜の嵐のようにあなたがたの耳元で雷鳴を轟かせた。

屋根の上から、私はあなたがたを偽善者、パリサイ人、詐欺師、偽りで虚しい地上の泡だと叫んだ。

あなたがたの中の近視眼的な者を、私は「盲目のコウモリ」と呪い、地に近づきすぎている者を「魂のないモグラ」に例えた。

能弁な者には「二枚舌」と言い渡し、沈黙する者には「石の唇」と言い、単純で純朴な者を「死に飽きることのない死人」と呼んだ。

この世の知識を追い求める者を「聖霊への冒涜者」と非難し、精神だけを求める者を「平らな水面に網を投げ、自分自身の姿しか捉えられない、影を追う猟師」と極印を押した。

こうして私は唇であなたがたを糾弾しながらも、私の心は内側で血を流し、あなたがたを愛おしい名で呼んでいた。

それは、自らを鞭打つ愛が語らせた言葉だった。塵の中で羽ばたく、半分殺されたプライドだった。屋根の上から荒れ狂ったのは、あなたがたの愛を求める私の飢えであり、その一方で、私の真実の愛は静かに膝を突き、あなたがたの許しを祈っていた。

だが、見よ、奇跡を！

あなたがたの目を開いたのは私の変装であり、あなたがたの心を呼び覚ましたのは、私の偽りの憎しみだったのだ。

そして今、あなたがたは私を愛している。

あなたがたは、自分を打つ剣を、自分の胸を欲する矢を愛している。傷つくことがあなたがたを慰め、自分自身の血を飲むときにしか、あなたがたは酔いしれることができないからだ。

炎の中に破滅を追い求める蛾のように、あなたがたは毎日私の庭に集まる。そして、顔を上げ、魅了された目で、私があなたがたの日々の営みの織物を引き裂くのを見つめている。 そして、互いにこう囁き合っている。「彼は神の光で見ている。昔の預言者のように語っている。彼は私たちの魂を暴き、私たちの心を開いてくれる。狐の道を知る鷲のように、彼は私たちの生き方を知っているのだ」と。

そうだ、確かに私はあなたがたの生き方を知っている。だがそれは、鷲が我が子の雛たちの生き方を知っているのと同じようにだ。私は自分の秘密を明かしたいと切望している。それなのに、あなたがたに近くにいてほしいがために、私は遠く離れているふりをする。あなたがたの愛の引き潮を恐れるあまり、私は自分の愛の水門を固く閉ざしているのだ。

これらのことを語り終えると、「先駆者」は両手で顔を覆い、激しく泣いた。裸のまま辱められた愛の方が、変装して勝利を収めようとする愛よりも偉大であることを、彼は心の中で知っていたからだ。彼は恥じていた。

しかし突然、彼は頭を上げ、眠りから覚めた者のように両腕を広げて言った。「夜は終わった。夜の子らである私たちは、朝の光が丘々を飛び越えてやってくるときに死なせなければならない。そして、私たちの灰の中から、より力強い愛が立ち上がるだろう。それは太陽の中で笑い、不滅となるのだ」